
私が大將軍ですから

黒詩鳥ver0.95

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私が大將軍ですから

【Nコード】

N2518T

【作者名】

黒詩鳥ver0.95

【あらすじ】

お詫びと訂正

はい、全く誤字とかそういう次元を超えた問題が発覚しました。何をとち狂ったのか作者は連載と短編を間違えて投稿していたようです。

読者の方々本当にすいませんでした。

この短編小説は広告替わりに残しておきますのでよかったです。読んでください。

※内容は連載の1話と全く同じとなっております。

(前書き)

この小説は恋姫無双の二次創作です

オリキャラが出てきます。おもいつきり出てきます。

書くに当たりゲーム版のみを参考としていますのでTV版と食い違ったりしていたらすいません。でも、寛大な心で許してくれると嬉しいです。

※お詫びと訂正

はい、全く誤字とかそういう次元を超えた問題が発覚しました
何をとち狂ったのか作者は連載と短編を間違えて投稿していたようです

読者の方々本当にすいませんでした

この短編小説は広告替わりに残しておきますのでよかったら読んでください

連載小説の方はこちらの方になります←

<http://ncode.syosetu.com/n2612>
t/

どうかよろしくおねがいします

俺は今、人生のうちで初めて神様にお願いごとしていた。

なんて言っただけで初めて一生のお願いを使っただけだからな。

これで助からなかったら俺は一生神様なんて信じないね。

「さあ、来いよ。お前が勝つか俺の運が勝つか勝負だ」

そんな意味のわからない挑発を試してみた俺に向かって走ってくる車は無慈悲にも俺の体を宙へと舞い上げた。

「グゲェ……」

予想以上に痛かった。

もっと一瞬で楽になれるものかと思っていたのだが、これは予想以上に凄まじく痛い。

そして神様の馬鹿野郎！！

そりゃ今まで良いことなんかほとんどしてこなかったけど悪いことだってしなかった……というわけでは無いけど。

そりゃ今朝だって寝不足でイライラしてたからって気持ちよさそうに寝てる鬱陶しい野良猫を蹴りましたよ。

だからって、こんなにすぐ天罰的なものを下さなくてもいいんじゃない

ないかな？

ほら、もしかしたらこの後あつと驚くような良い事するかもしれないしさ。

そんなことを考えている間にも空中へと舞い上がって体は舞い上がるのをやめて重量の気の向くままに地面へと一直線に落ちていった。

……もし死ななかったら、今度は少しは良いこととしてみようかな？

そんな意味が有るか無いかわからない決断をすると同時に俺の体は地面へとたたきつけられた。

体中の骨が折れてるんじゃないかと思うぐらい体が痛かった。

実際、折れている気もする。

死ぬ時は走馬灯というものを見るかと思ったが、どうも俺は見ないらしい。

きつと人生が短すぎて思い出すこともないのだと思う。

こんなに体が痛いというのにどこからともなく猛烈な睡魔が襲ってきた。

実際は睡魔じゃなくて死神が襲ってきているのだろう。

ああ……クソッ、毎日がつまらなくてもいいからさ。

「もっと生きたかった」

そんな俺の願いはどこに届くわけでもなく俺の人生は幕をあまりにもあっさりと閉じた。

筈だったんだが……

どうも世の中には神様はいるらしい。

それとも一生の願いが良かったのかはわからないが、俺は実際に生きていた。

再び目を開けたら、どこかもわからない場所に俺はいた。

明らかにおかしかった。

俺はさっきまで道を歩いていて車に轢かれたというのに、周りには家どころか道すらもなかった

あれか？俺、実は死んでいてここは死後の世界とか言うやつか？

死後の世界って予想以上に殺伐とした大地が続いてるんだな。

まあ、死後の世界にしたとしても俺は一体どうすればいいんだ？

そんな疑問ばかりを頭の中に浮かべても道案内の死神すらもない俺は適当に歩くことしかできなかった。

続く限りの大地。

三途の川なんて嘘ですね。

水なんてどこにもなかった。

「死んだというのに喉が渴くなんて考えもしなかったな」

もうかれこれ歩き続けて1時間ぐらいはたってるんじゃないかと思っていたとき、頭に黄色いバンダナらしきものを巻いた三人組の男を発見した。

俺はその三人組の方に向かって走っていった。

人じゃなくて死神かもしれないがそんなことは俺にとってはどうでもよかった。

とりあえず何一つ進展しないこの状況をどうにかしたかった。

「あの、すいませんが、ちょっといいですか？」

俺は出来る限りの愛想笑いを浮かべながら男達に話しかけた。

「ん？なんだ？」

「ここってどこですかね？」

俺が質問をすると男達はいっは何を言ってるんだといううような顔で見てきた。

「ここは荊州南陽郡の宛だ」

へへ、荊州か……ここ中国なの！？

「あのへ、もう一つ質問いいですかね？今って何年ですか？」

「184年だ。お前大丈夫か？」

「ええ、大丈夫です……」

俺、なんか死んだわけでも生き返ったわけでもなくタイムスリップしてる……！

たしか、184年っていったら中国じゃ黄巾の乱が起きてるよな。

……まさか目の前のゴツイ男たちは黄巾の方ですか？

「ありがとうございます……！！では、俺、急ぎの用事がありますのでそれでは……！！」

そうやって俺は素早く回れ右をすると急いで逃げようとしたのだが、男の太い腕が俺の肩を掴んできた

「まあ、待てよ。お礼に何か金目の物を置いていけよ」

「俺、金目の物どころか何も持ってないですよ？」

「じゃあ、その珍しい布で作られている服を脱げ。それとも俺達が脱がしてやろうか？」

目の前の男はそう言うと言腰に付けていた刀を抜いた。

抜かれた刀は太陽に照らされ鈍く輝き、その光を見るだけで俺は足が動かなくなった。

頭では逃げなければいけないと分かっているのに体のどの部分も言うことを全く聞かなかった。

「おいおい、めんどくせえ奴だな」

男そう言うと言とニヤリと笑った。

それに釣られるように二人の仲間たちもニヤニヤと笑うと、それが合図のごとく刀は一際、高く振り上げられると俺の体に向かって振り下ろされた。

その瞬間、あまりの恐怖に体も反射的に動いたのか俺は男の腕を必死で振り切って俺は不様に前に転がり込んだ。

転がり込んだおかげで間一髪で刀を回避することができた。

俺は急いで立ち上がると必死に走りだした。

後ろから男達が追いかけてくるのが肩越しに見えた。

俺は息をするのすらも忘れて走り続けた。

最初は恐怖が体を突き動かして疲れを忘れていたが次第に足が動かなくなってきた。

俺は覚悟を決めて後ろを振り向くと、さっきの男達が俺とは逆方向に走っていく姿が見えた。

「た、助かった」

俺はその場で崩れるように座った。

何があったのかわからないがとりあえず助かったことだけはわかった。

少し安心して前を見ると、前から土煙を上げながら馬が近づいてきた。

「ちょ、え……またなんか来た」

逃げようとしたが疲労と恐怖のせいで今度こそちつとも足が動かなくなっていた。

馬は俺の前で止まった。

馬の上には腰までありそうな長い栗毛色を髪におよそ中国とは思えないようなフリルのたくさん付いた水色の服を着た少女が乗っていた。

「あの大丈夫ですかあ？」

「え、ええ、何とか……」

「全く、黄巾の奴らめ！！見境無く民を襲うなんて許せません！！」
悪い人ではなさそうだが、少女は大変ご立腹だったので、なかなか声がかけれなかったが俺は勇気を振り絞って声を出した

「あの、すいませんところであなたの名前は？」

「へ？私ですか？私はですネ——」

少女が名前を言おうとしたとき、少女が来た方向からすごい速さでもう1頭の馬が走ってきた。

馬は勢い良く走ってくると俺にぶつかる既のところで止まった。

馬の上には紅い色の髪でツインテールの女が顔を真っ赤にさせた乗っていた。

「炎ちゃん、遅い！！」

炎と呼ばれた女は馬から飛び降りると少女の元へと詰め寄ると「貴女は一体、何をしてるんですか！！何も言わずにいきなり何処かへ走り出したらびっくりするでしょう！！」と怒りをぶちまけるよう

に怒鳴った。

怒鳴られた少女はというと反省を全くしていないのか大きく頬を膨らましてブーブー言っていた

「だってえ、この人が黄巾の奴らに襲われていたんだよ!!これは私が助けるしかないでしょう!!」

少女はそう言うとはとんど起伏のない胸を大きく反らした。

「だからって私に黙って行かないでください」

紅い髪の女は怒鳴り散らしたおかげでだいぶ落ち着いたので少女のそんな態度を気にするわけでもなく冷静に対応していた。

「だって、だってさあ」

「だってではありません。何進様は一応、大將軍なんですよ?それ自覚してます?」

「自覚してるよ。^{かえで}楓は大將軍だからみんなを守ってあげなくちゃいけないんだよお」

どうも、この少女は肉屋から大將軍にまでなった。

あの何進らしい。

なんで肉屋のおっさんが少女になっているわけ?

俺はタイムスリップしたんじゃないのか?

そんなこんな頭の中がぐちゃぐちゃに混乱しながら考えていると、
あちらも話がまとまったのか紅い髪の女が話しかけてきた。

「おい、お前は名前をなんて言うんだ？」

「結城 匆といいます」

「^{あひな}字は？」

字？……ああ、中国独特のあれか

「あの、無いです」

「無い？お前この国の者か？」

「えと……あの……」

参ったぞ。

なんて説明すればいいんだよ。

日本とか言っても絶対わからないだろ。

あれか、俺、実は未来から飛んできたんですよ。しかも異世界なんです。

駄目だ、どう聞いても危険な奴にしか思われないぞ……

「ほら、炎ちゃん、匆さんが困っちゃってるじゃない」

「……すいません。ひどく頭を打ったせいか記憶がうまく思い出せないんです」

「いいよいいよく気にしないでいいからね」

「そう言ってもらえると気が楽になります。ところで貴女たちの名前は？」

「私は何進、字は遂高だよ。ほら、炎ちゃんも紹介しなきゃ」

「私は皇甫嵩、字は義真だ」

……どうも二人は何進と皇甫嵩らしい。

嘘をついてるようには見えないが、なんで女なんだ？

やっぱり別の世界に飛んできてしまったのか？

あっちの世界の神様には嫌われたがこっちの世界の神様には俺は好かれているのか？

もうワケがわからないな。

この先、俺は一体どうしたものかと悩んでいたら。

「ねえねえ、匆さん難しそうな顔しているけど、どうかしたの？」

「あ、いや、この先、一体どうしようかと考えていただけです」

「もし、匆さんに行くところがないなら私のところに来ればいいよ」

「ちょっと、何進様、素性の知れぬこんな男を招き入れて問題でも起こったらどうするんですか？」

「炎ちゃんが何とかしてくれるんでしょう？」

何進はそう言うとなんとも純真無垢な笑顔を浮かべた。

さすがの皇甫嵩も笑顔には勝てないのかため息をつく。「分かりました。この男を連れていきましょう。そのかわり今後はひとりで勝手に何処かに行かないでくださいね」と言いしぶしぶ了解した。

「さすが炎ちゃん、ありがとうね。匆さん、よろしくおねがいしますね」

「何進さん、皇甫嵩さん、こちらこそよろしくおねがいます」

「ああ、くれぐれも何も問題を起こさないでくれ」

皇甫嵩はそう言うと言馬に跨った。

「じゃあ、洛陽に向かって出発」

これから俺はよくわからない世界でどうやって生きていくのだろうか？

そんなことを考えつつ俺は洛陽へと向かうことになった。

「ちょっと待って！！俺、馬がないんだけど！！」

(後書き)

最初に読んでいただきありがとうございました
気分を害された方がいたらすみませんでした
感想などを書いていただけると嬉しいです
返信の方は必ず行います

※お詫びと訂正

はい、全く誤字とかそういう次元を超えた問題が発覚しました
何をとち狂ったのか作者は連載と短編を間違えて投稿していたようです

読者の方々本当にすみませんでした
連載小説の方は同じタイトルでこちらになります←

<http://ncode.syosetu.com/n2612t/>

本当にご迷惑をかけてすみませんでした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2518t/>

私が大將軍ですから

2011年10月7日20時54分発行